

地域新聞にみる一九二五年から一九二九年(上ヶ原移転)
までの関西学院情報 — 『神戸又新日報』^{ゆうしん}を中心に — (上)

津金澤聡廣

はじめに

- 一、一九二五年三月の卒業式について
- 二、一九二六年の学院風景記事
- 三、一九二六年の学生クラブ活動
- 四、「上ヶ原移転」報道をめぐって
- 五、一九二七年後半の関西学院情報
- 六、一九二七年の学院運動部の記録(以下次稿)
- 七、一九二八年の記事にみる学院教授訪問
- 八、一九二八年の課外活動での活躍
- 九、一九二八年のスポーツ活動記録

〈はじめに〉

専攻の関係で古い新聞やそのマイクロ・フィルムを一枚一枚検索することが常となっているが、その過程でふと関西学院関係の記事が眼にとまり、つい読みふけることも多い。たまたま、大正末期から昭和初年の新聞記事について学院史編纂室の池田裕子氏と歓談した折、上ヶ原移転までの「原田の森」時代の関西学院資料が意外にも比較的少ないと聞かされ、改めてその頃の地域新聞に関西学院関連の記事がどのような形でどれほど掲載されているかを調べてみることにした。主にとりあげた新聞は、戦前の神戸をはじめ兵庫県紙として最も大衆的人気も評価も高い有力紙『神戸又新日報』である。そのマイクロ・フィルムを唯一所蔵している神戸市立図書館に通い、文字通りページづつ検索したところ、思いの外いくつかの珍しい記事に出会うことができた。ただ、どうしても見落しも避けられないので不完全な資料にすぎないが、新聞記事のなかにこんな情報も掲載され、散見されているという限りでの中間報告である。へ以下、特に断りのない限り、すべて『神戸又新日報』から引用・参照している。それ以外の新聞を引用する時はその旨明記した。〈

一、一九二五年三月の卒業式について

優等生に百円贈られる

新聞紙面に学校・教育関係記事がとりあげられるのは、そのニュースに通常の行事以上の何ら

かの話題性が含まれているからであり、前例のない出来事の場合には、より大きく取り扱われる。たとえば、一九二五(大正十四)年三月の「関西学院の卒業式」は二段抜き、四列の大見出しで、「優等の大塚碩夫君に、学校から金百円を贈る、全く前例の無い名誉を」と書き、次のように卒業式の状況をかなり詳しく伝えていて興味深い記事である。(以下、資料として貴重と思われる記事については、や、長くなるがそのまゝ、再録しておきたい。なお再録に際して、旧漢字は原則として当用漢字に改め、かなは多くの場合そのまゝとした。元の記事の漢字はすべてルビつきだが、引用文は原則としてルビは省略した。)

「関西学院第三五回卒業式は七日午前九時から同校講堂に於て挙行された。送る生徒も送らる、生徒も教師も来賓も声を揃えて『聖なる聖なる聖なるかな』と主を讃へて斉唱した後を聖書の朗読がおごそかに起り引き続き松下礼拝主事の心からなる感謝の祈りが捧げられる。

並居る者凡て頭を垂れ黙として咳すら漏れぬ。祈祷が終つて勅語の捧読があり君が代二唱も晴れやかに順序は進んで卒業証書の授与となる。

第三二回卒業の中学部が一四三名、第十回高等商業部が一二一名、第八回文学部英文学部へ注1)が十三名、社会学部へ注2)が十名、第十七回神学部十二名へ注3)と都合二九九名(氏名別項)、の栄ある新しい社会の闘士の代表に対しベーツ院長から夫々証書の授与が済むと

更に此中の優等生と精勤者^{このうち}とに賞品の授与もあつたが中学部卒業の大塚碩夫君の如き家には病父があり、その父を看護し家計を扶けつ、通学しては学業抜群の優等であるといふ所から特に学校から一百円を送られたのは前例無い名誉を荷ふた者と言はねばならぬ、『強く正しく進め』と鞭つ院長の告辞には涙ぐましい慈悲が籠つていた。

態々^{わざ}西下した前朝鮮政務総監有吉忠一氏はその後「欧州に於ける人種問題研究の趨勢を論じて我国青年の覚悟に及ぶ」といふ題下に縷々^る数万言約二時間四十分に亘る有益な長講演を試み、次で来賓としての平塚知事その他同窓会総代、在校生総代の祝辞、各部卒業生代表の答辞があつて最後を頌歌と祝祷とで式を閉ぢたのは午後零時半であつた。」

当時の卒業式の様子を彷彿とさせるが、来賓のひとり知事も出席して祝辞を述べているのも注目される。

〈注1〉「英文学部」は「英文学科」の誤り。

〈注2〉「社会学部」は「社会学科」の誤り。

〈注3〉この年の卒業生は別科のみ。

同窓の岩橋氏夫妻の渡英

一九二五年の記事で八月には、これも二段抜き、四列見出しで学院同窓岩橋武夫氏（一九二八年より四四年まで文学部へ専門部へ、法文学部へ旧制大学）で、講師、教授を務め、その後、日本ライトハウスを大阪に設立、理事長となる。渡英が報じられている。「盲目の夫と携えて、遠く異域に遊ぶ一女性、きを子さんの眼には感激の涙、岩橋氏夫妻英国に向ふ」と、次のような記事である。

「六日正午、郵船欧航定期船香取丸は港の雑音を後にあこがれの国へと鹿島立った。同船には来栖駐伊一等書記官、大原研究所の細川嘉六氏、音楽家の秋田滋子、市川喜代子両女史を始め軍人、会社、銀行員など多数便乗して居たが其の華やかな人々の間に不自由の身を夫人にまもられ



『神戸又新日報』1925年8月7日

てはるばるとローズ香る英国へと旅する盲青年があつた。此の青年夫婦こそ嘗て本紙に其のいたましい半生を掲げた大阪盲学校々長岩橋武夫君と夫人きを子さんとである。盲目の夫と相携えて一女性の身として遠く異域に遊ぶ——と云ふ感激できを子さんは眼に一杯の涙をたゝえ、一々見送りの人々に丁寧な挨拶をして居たが『このたびは色々と御厄介になりました有難うございませ、又お暑い所をお見送り下さいまして……』と夫君を顧みて記者の来訪を通じる。

英國へ向ふ岩橋氏夫妻

岩橋君オレンヂ色の背広にきやしゃな身体を包み記者の手をしつかりと握りつめながら心からなる感謝の意を表したが感激にみちた言葉尻はおのづとふるえて居た。入り代り立ち代り詰めかける見送りの人々に気を兼ねて記者は別辞を残して間もなく立去つたが、夫妻は三年間の予定でエヂンバー大学に遊び哲学を基調とする方面の研究に没頭するが、同大学でも同地の盲人も非常に同情を寄せ種々の便宜をはかつて呉れる筈であると。

この記事に添えて、これも二段、二十行分の、英国エンジンバラ大学へ向う若き日の岩橋氏夫妻の大きな写真が掲載されているのが印象的である。

二、一九二六年の学院風景記事

学院の近未来探訪

一九二六年の紙面には、学院の学生クラブ活動に関する報告が散見されるが、それはあとでふれるとして、「九十九年後の神戸見物」という連載物の大学の項に、当時の学院の風景や学生風俗をや、興味本位で紹介したルポルタージュ風フィクション記事を発見した。筆者は「雲行生」というペンネームで、「神戸が日本の文化の中心地であること今更申すまでも無い」という書き出しではじまっている。

〔へ前略〕朝戸文学博士の案内で関西学院大学部を一見した。昔の西灘村上野のあたりを全部構内にとり入れて、林を造り池を掘り、花壇を設け温室を建て、その間に風雅な校舎が散在している。小生は先づ、正門から左へ丘の上なる英文学科のクラブに朝戸博士と紅茶を共にした。

『この大学の文科生は昔から同人雑誌を出したがるので困ります。只今七十八種出ていますが、中には変名で個人雑誌を三つも出しているのがあります。』周囲の壁には、出ては潰れたる二号雑誌、三号雑誌の表紙だけを額にして掲げてある。『横面』だの『クライマックス』だの『ヴェキタ・セックスアリス』だのヘンテコな名前のが沢山ある。

一緒に神学部の前を通っていたら純白の洋装の女学生が七、八人出て来た。みんなうるほひの

豊かな麗人である。『女の牧師を出すのですか』『もう男だけでは足らなくなり、毎年沢山カナダや合衆国に伝道に行きます。一世紀前の恩返しに、金も沢山送っています』と頗るうれい話を聞いて、大いに愉快になった。

寄宿舎は今七階のアパートになり男女生混宿である。聞きなれない讚美歌が窓から漏れる。東洋各国の各派教会の新讚美歌は悉くこの寄宿舎から生れて出る。ここから東が『緑の学園』と呼ばれる区域だ。へ中略へ『資本主義〇〇史研究室』と云ふのがあった。入口に半鐘とサーベルを飾ってあった。何の意味か判然としない。とても立派な蛇と林檎の大理想が木かげに立っている。

『何のシンボルですか?』と小生。『これは、神戸女学院と関西学院の宗教科と英文学科だけが合併された時、記念に女学院から送ったものです』なあるほど、小生も学者だから見当がついた。『向ふの美しい建物は何です』『あれは校内礼拝堂で、今夜三組の結婚式がトコロテン押しにあります』『そんなに、成立してもいいのですかね』『なあに、またやり直して居ますよ』に流石の小生もギャフンとばかり地面にひっくり返った。出石の里から見ると、だいぶん思想が進歩しているらしい。」

や、くだけた仮想ルポの形をとっているが、当時の学院の進取的な雰囲気だけは何となく伝わってくる記事である。

河上教授弁護士事務所開設

この年の十一月には、これも二段抜き顔写真入りで、「関西学院教授の河上氏が弁護士に、刑事訴訟に自信がある、適法で人間味の豊かな弁護を」という記事も出ている。

「関西学院教授河上丈太郎氏
弁護士に」



『神戸又新日報』
1926年11月17日

「関西学院教授法学士河上丈太郎氏は神戸市宮本通二丁目二一（阪急終点ガード下る三軒目西入）に於て弁護士を開業した河上氏は、一高在学中から鶴見祐輔氏と共に雄弁家として東都学生弁論界の牛耳を握り十年前來神、引続き関西学院に於て法律、社会学等の科目を受持ちまた学院の弁論部長として青年論客を指導している。氏は民、刑事を扱ふも刑事訴訟に自信があるさうで『ことに将来は陪審制度を有意義ならしめ最も適法にして人間味の豊かな弁護を

することが肝要で、私の弁護士としての使命もこの点にあります。』と語っていた」と報道されている。

河上丈太郎教授が学院の弁論部長として学生の弁論部活動を積極的に指導し、多くの論客を育成したことが特筆されよう。（学院では大正十四年から「講演部」と呼称）

なお、ここで大正末期から一九二九年三月上ヶ原移転までの関西学院学生募集広告についてふれておきたい。次頁に再録した広告は『神戸又新日報』の一九二四（大正十三）年三月に掲載されたものであり、この三段十三行分の大きさのタテ書き広告はその後余り見当らず、一九二八・九年の各一月に散見した学生募集広告はいずれもヨコ書きの一段ものになっている。その間の広告内容のうち、高等商業学部二百名は変わらず、文学部については大正期では、英文科五十名、社会科・哲学科五十名と募集人員が学科別に分れていたが、昭和初年分には文学部三学科一括して百名となっている。その特典説明も前者は「但シ英文科卒業後ハ中学教員英語科無試験検定ノ特

地域新聞にみる1925年から29年(上ヶ原移転)までの関西学院情報

典アリ」となっているのに対し、後者では「中等学校教員無試験検定ノ特典アリ」と英文科に限らぬことが強調されている。願書受付は毎年三月末であり、入試試験は四月のはじめの三・四日に行われている。いずれも学校名の上には必ず「神戸」とつけてあり、「神戸・関西学院」として親しまれていたことがわかる。

『神戸又新日報』一九二四年三月一日朝刊

『大阪朝日新聞』1928年1月25日朝刊

三、一九二六年の学生クラブ活動

活発な学生体育会活動の記録

「原田の森」時代には、学生の各クラブ活動が全国の有力大学・高等専門学校との交流を通して活発に展開されている。

たとえば、一九二六（大正十五）年の体育会関係（当時は「運動部」と呼称）の対外試合の記録を時系列的に追ってみても各部の活躍が多彩に記録されている。

まず、一月三日には学院高等学部対立教大学との第二回野球戦が行われ、六対二で「関高遂に復讐す」と二段抜きで報じられている。これで見ると、第一回定期戦は惜敗したものであろう。

五月九日からは、第十四回学生角力大会が開催され、中等学校部門には中学部が、大学専門部門には学院高等学部（注1）も参加出場している。当日の朝刊第一面には三段抜きで「三都県下の雄を蒐めて、今日ぞ晴れの争覇戦」「午前八時より須磨寺グラウンドにて、風薫る日を『男性的国技』の大見出しである。当時角力は学校スポーツとしても国技として盛んに行われ、ことに学院相撲部は実力抜群の名門校として知られていた。この日開会式後の優勝旗返還式では、「専門部第一優勝旗」は学院高等学部大守君、「中等部第三優勝旗」は学院中学部高橋君が返還している。なお、参加校推薦の審判委員には、学院高等学部から松本巴が選ばれている。

「帽子の波、応援歌の喚き、五月晴れの須磨原頭は時ならぬ動揺めきを見せて英気天地に溢れ、若葉に吹く風も薫る九日、歴史あり権威を誇る本社第十四回学生角力の大会は、参加校実に

二十有一、百数十名の各校代表選手に依って、見るからに血湧く猛闘を重ね、真に火を発するばかりであった」と伝えられるほどの熱戦であったようだ。結果は、中学部(宮下、一宮、松田、石田、六鶴)は甲組で育英商業に次いで二位に終り、高等学部(吉田、唄野、岡添、松浦、安田)は健闘して、大阪歯科医専、神戸高商と並んで三校で優勝を争うことになったとして、その間の学院高等学部の「破竹の勢い」を次のように描写している。「大阪医大富永には、出身高の関西学院応援団が『フレフレ富永』と声をからして応援する」「関高は美事相手の大阪外語をなぎ倒しへ注・五対〇ファンを唸らせる。」

また九月二十三、六日まで、学院高等学部蹴球部は第二回「全国中等学校蹴球大会」(於関西学院グラウンド)を主催しており、同じく九月二十四日には、学院高等学部柔道部が第三回「全国中等学校柔道優勝大会」(於諏訪山武徳殿)を主催して注目される。いずれの大会も毎年、神戸又新日報が後援しているが、当時、サッカー部や柔道部自体が中等学校の全国大会を主催するということはそれなりの高い評価と権威がなければ実現できぬことであり、両部の全国的な声価を示すものといえよう。

当時、サッカーは「ア式蹴球(アソシエーション・フットボール)」と呼ばれ、学院は中学部も含めて当時すでに名門の誉れ高く、第二回大会でも中学部は、近畿一円からの参加校三十六校中上位に立ち、残念ながら準決勝で甲陽中学に五対一で敗れた。甲陽中学は「本社寄贈の優勝旗及び関学優勝メダルを受けて喜びに満ちて退場」と報道されている。「関学優勝メダル」というものが授与されたのが興味深い。

一方、第三回全国中等学校柔道優勝大会では、参加二十数校の中で中学部(広川、三浦、大

『神戸又新日報』
一九二六年九月十九日の第二回全国大会の「社告」

全國中等蹴球大會

期日 廿三、四、五、六日
場所 關西學院グラウンド
参加 全國二十四中等學校

主催 關西學院蹴球部
後援 神戸又新日報社

一九二六年九月十九日の第三回全国大会の「社告」

全國中等柔道優勝大會

期日 廿四日午前八時
場所 諏訪山武徳殿

選手申込締切來る廿一日限

主催 關西學院柔道部
後援 神戸又新日報社

一九二七年九月六日の第三回全国大会の「社告」

全國中等了式蹴球大會

期日 九月十七日(土)十八日(日) 四日間
場所 關西學院庭及東遊園地

申込 九月十日迄(神戸市外原田村 關西學院高等部蹴球部)

主催 關西學院蹴球部
後援 神戸又新日報社

地域新聞にみる1925年から29年(上ヶ原移転)までの関西学院情報



全国中等学校蹴球大会始まる

『神戸又新日報』1926年9月24日、第2回全国大会第一日（於関西学院校庭）

松、伊勢本、田中）は、三回戦で甲陽中学を破り、準決勝で池田師範に勝つという健闘で、優勝戦で残念ながら岡山一中に惜敗し「関中の大将田中奮戦及ばず」と報じられた。

また、九月二十六日には、第三回「早関対抗水泳」が大阪築港プールで開催されたが、早大高石選手は八百米自由型に四分四八秒の日本新記録をつくり、結局学院が三八対八で大敗した。あるいは、十二月十六日には神戸東遊園地グラウンドに於て高等学部と神戸高商との定期蹴球戦で五対一で快勝との記録もあ

る。

〔注1〕一九二二年に創設された高等学部（文科・商科）は、二二年に文学部、高等商業学部として独立し（神学部、文学部、高等商業学部を専門部とした）、関西学院では「高等学部」という組織は発展的に解消された。ところが、当時の新聞では、両学部を併せて「高等部」、「高等学部」等と表示することが多かったようである。

文化・学術系の学生活動の記録

神戸又新日報社の主催で一九二六年三月に「店頭装飾競技会」というのが開催されたが、これは、神戸市内有名店舗の店頭デザインについて一般投票（甲種審査）と乙種（専門家の審査）、丙種（神戸高商、関西学院、神戸高工三校学生による審査）の審査によってその人気高得点の店舗を表彰しようというイベントである。この丙種審査員として学院からは増井登、水野一二三両名の評が掲載され、専門家の立場からは学院の那須生平教授が審査の基準について説明している。こうした一般商店のデザイン・コンテストに学生が審査員として積極的に論評を求められているという点に当時の学生に対する社会の評価がいかに高かったかをうかがうことができる。

学生の講演・弁論活動も活発に行われていたようで、六月十九日には、高商、高工、関西学院三校連合の第六回「学生学術講演大会」が神戸市内下山手青年会館で催されるとの記事も出ている。その翌日には、湊川勸業館に於て、関西学生講演連盟主催「言論擁護演説会」が開催され「関西各大学専門学校代表弁士十数名熱弁を振ふ、文相の学生言論抑圧に反抗して起てるもので

ある。何人も入場随意」と報道されている。

さらに、十月三十一日には、早大、関学、同志社大学連合の第一回学術講演会が、当番校である関学大講堂で開催され、一般市民の来聴歓迎との予告記事もみられる。また、十二月四日午後一時より「全国学生経済講演会」(於神戸高商講堂)開催の記事もあり、指定題目は「一、我国銀行及金融に関する諸問題、一、人口及食糧問題」とある。この講演会には学院からは、水野一二三「経済政策の根本義」と藪下益治「食糧問題解決策」の名が、早大、慶大や東京商大、神戸・大阪・名古屋各高商の学生弁士と共に出演予告されている。

社会科学研究会責任者学生の処分事件

なお、十一月には、学院社会科学研究会の責任者除名というベタ記事が載り、次のような学院対学生の対立、処分事件を伝えている。

「学校当局よりの要求に対し『自由の暴圧』だと反発的ビラを撒布して当局の措置を糺弾したが、十三日に至り突然研究会責任者酒井一雄に対して学籍から除名する旨宣告したので一部学生は除名処分に憤慨し全日本学生自由擁護同盟、全日本学生社会科学連合会本部に飛檄して応援を求むると同時に同研究会は急拠総会を開いて対策を協議した」

その後、十一月十七日の紙面では「放校処分から、関学生の動揺」「復学請願連盟を作り、各クラス会で決議」と二段抜き四列見出しで、事件の波紋の拡がりを報じている。つまり、文科四年酒井一夫の処分に対し、彼が在学中関係していた高等学部学生役員会、出版部、講演部、社会学会委員会等の各学生はそれぞれ善後策を協議中だったが、ことに彼が部長として就任していた

出版部では最も慎重に対策を講じているという。

「一方一般学生に放校処分経過が徹底すると共に次第に同情は酒井の上に沛然として注がれ、学生中の強硬分子は処分発表以来鋭意事実の真相を調査し来り漸く学院当局の態度に誠意を欠くものあり且処罰を決定した当局の行動は支離滅裂で教授会の意向が停学処分が至当であると云ふに反し、僅にベーツ院長、神崎商学部長等二、三の硬派の教授に依って放校処分に決定されたと判明するや、学生側は奮起し頑迷な当局に反省を促すとて十六日文科一年、社会科、哲学科合併クラス、英文科四年、社会科等の各クラス会を開き、彼の除名処分反対復校を決議し又各教室では十四日成立した『酒井一雄君復学請願連盟』を作り幹部の運動が手ぬるしとして悲憤慷慨する学生もあつて、院内は異常に緊張している。」

この記事では、今後学院当局の態度如何では運動は意外な方面まで進展するものと見られるとしながらも、その後の続報は見当らない。

〈注〉 関西学院新聞縦の会『関西学院新聞部四十年』（昭和三十八年）九頁に、酒井一雄（大十五・

文中退）氏自身の「軍教反対運動をやったところ」という一文が掲載されている。本人の述懐によれば「処分の原因は『軍事教育に反対のビラを配ったこと』『学院のスクール・デイグニティをきずつけたこと』等だったと思う。」と述べ、また「私はベーツ院長に中央講堂の二階にあつた院長室に呼ばれ『この学校で学ぶ学生はベイチュリオティストであつてもらいたい』と訓示され、岩本君に後事を托し、荷物をかついで郷里へ帰って行つた」と書いている。

なお、池田裕子氏の調査によれば、『母校通信』第22号（一九五九年十月）に、磯島正一（昭

五高商)氏がこの事件の処分に対するベーツ院長の想いについてふれられている。

「(前略)卒業間近い彼、母一人子一人という家庭の事情も手伝って、学友の同情が集った。代表五名はベーツ院長に処分撤回の陳情に及んだ。日頃温和な院長とは打って違ってまことに峻厳な表情、しかも珍らしく日本語でゆっくり話された。」

『私は外国人でありながら、日本政府から日本の青年の教育を任されています。その学生の中に、テンノヘイカに背くものがおったのでは許すことが出来ない。私が日本人であったなら君達と一緒に政府にSの助命を乞うであろう。』

この言葉を伝え聞いて在校生一同今更らながらベーツ院長の忠誠に感服したものです。」

また『母校通信』第6号(一九五一年五月)には、「同窓訪問(9)」として「信念に生きる・酒井一雄さん(昭二文学推)」として、退学処分後の酒井氏について次のような記事があり注目される。特に引用させていただく。

「酒井一雄さんと言へばスグ『ピラ事件』を思ひ出すだろう、文学部卒業の真際に『軍事教練反対』ピラを学内に散布し当局の忌避に触れ『即時退校』を命ぜられた、世を挙げての軍国の時代、学友はその大胆さにキモをつぶしたのも無理もあるまい。

世におもねらぬ隆々たる気骨、信念に生きる熱血の士、神戸市会議員当選三回かつて副議長をつとめたこともある。

酒井さんは雪深い信州松本の生れ、賀川豊彦氏を慕ふて遙々来神、関学に学ぶかたはら社会運動に身を投じた、戦後は『食糧問題』と取組み、赤ちゃんの主食補給のため北海道から乳牛を移入したのも同氏であった、兵庫県食糧危機突破民主団体協議会の書記長として戦後の食糧

対策に全精力を傾けた功績は神戸市民の忘れ得ぬところ、神戸協同農産株式会社々長の現職はその産物であると云う。

酒井さんはたしかに関学が生んだ名物男、変り種の一人であろう。(K)

学生会主催の音楽会とその他の活動

阪急電鉄の沿線PR紙『阪神毎朝新聞』(一九二六年一月創刊、毎月三回発行)の六月十九日号には、「宝塚シンホニー演奏会」が「浪漫的音楽の先駆者・ウェーバー百年祭」を記念して関西学院学生会運動部主催で、六月十七日夕七時から学院中央大講堂で開催されたと伝えている。この演奏会については『又新日報』でも、宝塚少女歌劇の高峰妙子やシヨルツ教授等出演と書いている。

十一月二十七日には「関西学院学生大音楽会」が学院学生会社交部主催で学院中央大講堂にて左のプログラムで開催と報道された。

へ第一部 ▲校歌 ▲ハモニカ合奏「ウイリアムテル」 ▲四重唱「夜明けまで」「冬枯の森」合唱
 「美しきトレイ」「船乗の唄」 ▲管弦楽「カルメン幻想曲」 第二部 ▲ハモニカ合奏「セヴィラの理髪師」 ▲マンドリン四重奏「漁夫の舟唄」「ミニユエット」 ▲ピアノ独弾(北川浩) ▲合唱
 「主は我が牧者なり」「蠅」 ▲マンドリン合奏「レナータ」

また、十一月には「世界一周実地修学旅行団」のアメリカ合衆国大学生(約六百名)が来神の際に、その市内見学のガイド役に「関西学院、高商、高等工業並に女学院でペラペラの達者な生徒さん約五十名」が選ばれ、いわばボランティアとして活躍している。九日から十一日までこの

米国海上大学一行を、連日二百二十名づつ県会議事堂に招待し午餐会ごさんかいを開催したが、十一日は主催神戸市で司会を神崎関西学院高等商業学部長、歓迎の辞黒瀬市長となっており、案内者は第二班が関西学院十五名、女学院、愛隣会基督教青年会各二名で、見学や買物の通訳の労をとる由、と報道されている。ちなみに各校別ガイド役は、高商十一名、高工六名、女学院計四名だから、学院生がいちばん多く活躍していることになる。

四、「上ヶ原移転」報道をめぐって

『大毎(大阪市内版)』による上ヶ原移転のスクープ記事

一九二七(昭和二)年の正月四日に『神戸又新日報』に十津川雁公署名の「人間はみんな平凡である」という人物評が掲載された。その中にベーツ先生についての次のような短評が目にとまった。

「ベーツ 何もかも高いんですね。せい、鼻、人格……。鼻めがねをかけて、かう大手を拡げた格好は、講壇の人としてとてもい、ですね。私はクーリッヂの次にはベーツを大統領にしたいんです。関西学院長には惜しいです。」十津川雁公とはペンネームであろうが、他の人物に対するかなりの辛口評と比べるとベーツ先生評はこの人最大級のほめ言葉のようである。

この年初には、阪急沿線小林に聖心女学院が引越してきたニュースが話題になった。阪急の沿線誘致の一環になるもので、『阪神毎朝新聞』(昭和二年一月一日号)では、「来る一月七日頃より宏壮なる新校舎で授業を始めることになった」と書き、「建築界の粋を集めた理想的な新校

舎」とその写真入りで報道している。いよいよ学校誘致による阪急の沿線開発が大きく動き出したことを予感させた。

そうした状況のなかで、『大阪毎日新聞』三月十八日付朝刊大阪市内版で、二段抜き四列見出しの「関西学院の移転地は、上ヶ原新田に、決定したらしい、明春全部移転か」というまさにスクープが掲載された。や、長くなるが、そのスクープ記事全文を資料として次に引用したい。

「関西学院では将来医科大学をも含む総合大学を建設せんとするのと現在校舎狭隘のためかねてより移転の意思を有し極秘裡に候補地を阪神各地に物色中のところ、いよく阪急西宝線仁川の上流上ヶ原新田七万坪の地に決定した模様である。同所は甲山麓の高台であるため眺望極めてよく茅海を一望に集め校地として極めて清浄な土地で同校では過日来阪急その他平塚嘉右衛門、芝川又右衛門、北村吉右衛門氏等と内々交渉中であつたが最近急転直下に話が纏まとまったので学院側では二十日の理事会で協議し更に五月一日米国で行はる、理事会にかけた上、最後の決定を見るはずであるが、事実上もはや決定的のもので土工は六月ごろからはじめ建築は七、八月ごろ着手し全部が同所に移転するのは明春三、四月ごろかおそくも二学期初めまでに竣工の予定である。」

たしかにスクープ記事のようでもあり、反面でアドバルーン記事のような含みもみられる。これに対し、阪急・上田専務の談話は次のようである。

「関西学院の移転問題はかなり前からの話で学校や地主に対する交渉は会社の安威秘書課長が万事引受けてやっているがまだ決定したともしないとも聞かない。しかし話は余程接近していることはほんとうだ。学校側の条件は現在の校地や校舎を阪急に引き渡すから、どこか適当な十万

坪ばかりの土地に校舎を建築してくれといふのである。何百万の金を一時立替へねばならぬ上、それに旧校地や校舎がいくらほどに売却出来るか判らないので打算的に考へれば出来ないが、やる仕事が育英事業であるし、ひいては西宝沿線の繁栄にもなるのだから会社としては出来得る限りの便宜と犠牲を払ふ積りである。現在話している七万坪では少し足りないが官有地を二万坪ほど払下げが出来れば尚結構と思っている」

学院の神崎高等商業学部長は「断言は出来ぬ」と当然のことながらかなり慎重な談話である。

「学院の移転候補地としては、上ヶ原、芦屋、住吉、六甲の四ヶ所を挙げられているが、目下いずれともきまっていない。しかし遅くとも本月下旬乃至四月初旬までに大体方針を立て理事会を開いて決定した後五月中旬に開かれる米国伝道局年会に移転問題を持出して承認を受けねばならぬ」と、このスクープ記事に対しては明言をさけている。

『神戸又新日報』の上ヶ原移転記事

この『大阪毎日』のスクープ記事は大きなニュースであったが、なぜか他紙は沈黙を守り、ようやくその二ヶ月十日後になって、地元有力紙の『神戸又新日報』が五月二十八日朝刊第一面トップ、四段抜きの大見出しで「関西学院の移転先は、阪急沿線仁川に決定」「市の運動奏効せずして、六甲移転説遂にやぶる、二十七日理事会議で通過」と大々的に報道した。そして、学院の移転は既定の事実で、ただどこに移転するかが問題であったが、五月二十六、七両日に亘る理事会でいよいよ仁川という事に意見がまとまったものと「確信せらる可き節がある」と次のような記事である。かなり細かな内容にもふれているので、この記事もかなり長いが貴重な資料として

全文を再録しておきたい。

「そもそも関西学院が専門部を大学に昇進したいと云ふのは多年の熱心なる希望であるが大学にする為に一科に就いて五十万円を政府に供託せねばならず更に一科を増す毎に十万円づつ供託金を増すのであるが、関西学院に大学部を置くとするれば文科、商科の二科を置かねばならぬから六十万円といふものを政府に供託せねばならぬ訳であるが、今の同学院としては其金の出所がなく更に大学昇進に伴って諸設備を完備せねばならぬのである。然るに学校経営の現状は年々約二十五万円の支出を要し之に対して授業料、試験手数料等の収入約十五万円を充当して、その不足分十万円はカナダ共同教会へ注1、及び南カトリック教会へ注2から五万円づゝの補助を受けている有様であるから此際同校とし他からの金の見込がないのでそこで適当な土地に移転してその土地と現在の敷地との価格の開きで総ての費用を捻出したいと云ふのが移転の主旨であるから即ち

一、安い適当な土地を買ひ入れること

一、同時に現在の敷地をそっくり買って呉れる人があること

と云ふ二つの条件がピタリと合ふて無ければ移転は勿論不可能のことである。この条件の下にたまたま話の合ったのは阪急であった。即ち阪急はその沿線の繁栄策として同校をその沿線に移転させることが有利なので阪急と関西学院との間にいろいろと往復があつた結果

阪急の手で仁川の土地を買ひ入れ更に同時に現在敷地を阪急が買はう

と云ふ所へ漕ぎ付けてそこで阪急の小林氏は先月二十五、六日頃宝塚ホテルに於て大地主芝川、平塚両氏と会見し同氏等所有の土地七万坪を坪八円の価格で阪急が買入れるに就いて

一、その土地には必ず関西学院を移転させること

一、但しそれが出来ない場合は他の適当な学校を必ず持つて来る

一、その付近に直ちに住宅経営を始める

と云ふ三条件の覚書交換があり阪急の手から手付金として十万円は渡済みになりその利子は関西学院の手から払はれることになっているといふ噂があった。所で一方神戸市では同学院を他に移転させることは市として得策でないので黒瀬市長は熱心に学校側に口説き六甲付近の土地買入費として先に阪急が仁川方面へ払った手付金十万円の返却及び土地買収費として二十万円合せて三十万円の金を出さうとまで切り出した結果仁川か六甲かで議論が起つたのであるが前述の事情の通り現在の敷地を三百万円以上(二万八千坪に校舎をつけて)でスパリと買ってくれろといふ条件が付かぬ限り阪急以外には行きかねるので位置としての理想がある程度まで満足させられる以上此当面の現実問題を先きにせねばならぬのであるから大学が仁川に赴くは当然で到底六甲説は実現されさうもなからうと観られる。」

『大毎』スクープよりおくれたとはいえ、この『又新』の「上ヶ原移転」記事は相当丹念な調査取材を重ねた上での内容であることをうかがわせる。そして六甲移転説が一方で有力だった理由を、学院専門部の学生の三分の二以上は大阪方面から通学しているので仁川を希望するのはもつともとして、中学部はそれでは成り立つまいと学院当局も考慮し、事情が許せば中学校は現位置に残して専門部だけを移転させたいという意図も見受けられたと記者は推測している。

「而して此の移転問題はその旨を米国の全権委員に打電し全米ミッション会議の承認を経た上でなければ正式の決定にはならぬのであるから、その承認を待つて正式の発表をする運びになる

ものと見られる」と結んでいる。

さらに、この取材記事では、それではなぜ阪急が三百二十万円もの大金を出して学院の現在敷地を買ったのか、それをどうするつもりか、阪急の魂胆は？と鋭く迫っている。

「巷間説を為すものは、阪急が何等かの形式でそれを市に寄付し予てから行き悩んでいる高架線乗入れと交換する下地ではないか、と云ふのである。余りに穿ち過ぎるやうにも思はれるが併しマンザラより所の無い想像でも無いこと自から肯かれる次第であろう」とまさに核心をついている。

他方、神戸市繁栄の衰退を憂えていた黒瀬市長は何とか学院の上ヶ原行きを食い止めようと学院当事者とも密談を重ねたようだが、その市の苦心も水泡に帰し、遂に市長の六甲案は世に現れずに終わった。『又新』の記者は学院の仁川移転決定は「神戸市の繁栄上大なる打撃たることは絮説を要するまでもないことである」と断じている。(周知のように、この六甲台地の地は後に、当時の神戸高商(現神戸大学経済・経営学部)が県・市の誘致に従って移転し現在に至ることになる。)

なお、この上ヶ原移転前後の生々しい舞台裏の事情の一端については、山内一郎院長が「院長想譜」(『関西学院フロンティア』21 第5号、一九九九年六月刊)でふれられているように、当時、アメリカ帰りの少壮実業家河鱈節氏かわばたみきおが(小林一三との橋渡し等に深く関わったのであるが)、後に「仁川に決定の日」という回顧録を書いていて注目される。

〔注1〕「カナダ共同教会」は「カナダ合同教会」の誤り。

へ注2〕「南カトリック教会」は「南メソヂスト教会」の誤り。

五、一九二七年後半の関西学院情報

ベーツ院長の大雄弁と吉岡学院名誉院長の肖像除幕式

学院長ベーツ先生は、永らく病氣静養のため故郷のカナダに帰省しておられたが、先生が神戸に帰られてから校外でなされた最初の演説は、一九二七年十二月三日夜、県会議事堂みかど食堂で行われた。これは、日米協会の晩餐会の席上での演説で、紙面では次のように要約して報道している。

『私は過ぐる五十年の中に最初の二十五年をカナダで、次の二十五年を日本で過ごした。病気で死から甦った私はこれから第三の二十五年を更によく日本で暮りたい』
と前提してカナダ帰省中の思ひ出を語り、

『最も愉快だったのは、リンドバークの大西洋横断飛行である。かれはこの壮挙によって大西洋を断たるる時無き橋を架した。今や日本人は、太平洋上に日米間を結ぶ橋を架せんとしてゐる』

と、この壮挙を祝福し、

『然し、ほんとうの橋は両国民の好き感情である』

と、平和を愛する心こそは真の国際平和の基であることを説明し、

『カナダとアメリカ合衆国との間には一の砲壘無く、何等警備の兵も無い。然し両国に未だ曾

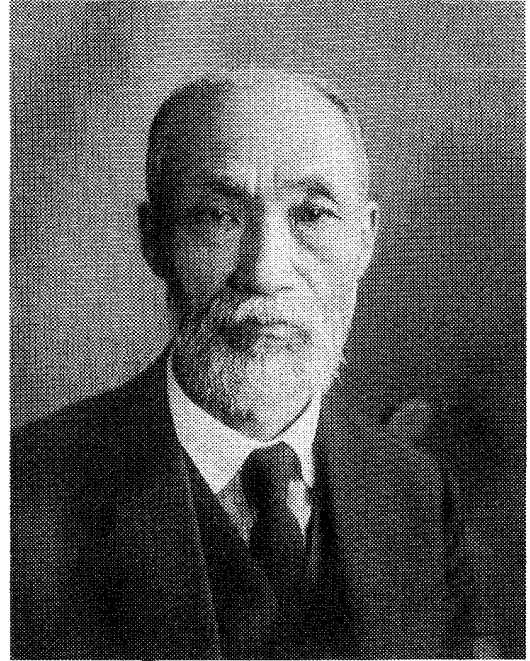
て紛争を見ないのは両国民の間によき感情があつて、常に融合しているからである。このカナダとアメリカ合衆国との例を他の各国の間に何故実現し得ないのであるか』と喝破して盛なる拍手をむくいられた。ベーツ院長は更に説き進める。

『日本は、ロシアが革命のために乱れ、支那が内輪もめし、インドが不安の状態にある間、ひとり、確乎たる足どりで静かに文化の過程を進んで来た。かくて今やイギリスにも見ざる教育の普及を見ている。この国民こそは東西文明の融合をなさしむべき光榮ある責任を持つており、且これをしとげる実力を持つ』
と、巧みに日本を称揚した」と結んでいる。

この年十二月十七日には、吉岡美国学院名誉院長の肖像除幕式が行われた。「私の欠点を求めては向上の資とされたい」「老先生壇上から 壮重な叫び」という二段抜きの見出しで、次のような記事が写真入りで掲載された。

「先に吉崎博士の建碑式に香しき子弟達の熱誠を披歴したる美談を伝へ、又こゝに全学院学生一致恩師吉岡美国博士の肖像除幕式を十七日午前十時、中央大講堂に於て高等学部学生全部集合、讚美歌合唱、柳原牧師の聖書朗読、祈祷について、学院グリークラブは『神は我が牧者なり』の讚美歌を歌ひ、肖像を覆へる紫色の布満堂溢る、ばかりの拍手裡に、ベーツ院長、ヘーデン部長の手によって除かれた。

ついで、高橋学生会長は肖像作成に至った次第を述べ、こはい父なるも、又情ぶかい母である先生の肖像を、ランバス先生、ニュートン先生の肖像と共に掲げることがいかに誇りであるかと結び、続いて学院生えぬきの奥田氏は、先生が我が学院の産みの親であると学院の創立当時を



名誉院長 吉岡美国先生

偲び、現在に語り及んで、先生の健康なるおからだと同時に今こゝに肖像を眺めうることはどんなにうれしいことか知れないと先生の功労をたた称え。続いて白髪ママの吉岡博士、破る、ばかりの拍手の裡にいと壮重なる語調にて、

この度肖像をお造り下さいましたについては、ベーツ院長、奥田氏、高橋会長より極めて親切なる言葉を戴きまして、まことに感謝にたへませぬ。決してこの讃辞は今更乍ら私

には当らないことを感じます。学院創設の時から神の「思」召しにより幸に学院の今日の発展を見るだけに命を長らへいることのできたのは幸福であります。

正直にいへば、挨拶らしいことは私には決して云へない。ランバス先生の手伝ひをし乍ら不肖院長に就いて二十有余の年月を経、学院三十九星霜の間、不変の関係を続けただけで学院学生に対して力を与えたとは今日の老令に至ってそんなことはないと思ふ。只神の思召と一つにない同僚学生諸君同窓諸君と共に力を協せて今日の学院を作ったのである。

私は決して面影をいつまでも偲ぶといふやうな名誉を負うべきではないと思ふ。むしろ長年月の間功績を慕ふよりも又様々の多くの学生諸君に大した影響はなからうと思ふ。満腔の感謝と共に人は一代一代その前代より進むよりよきものになって行くのが当然である。昔を偲び昔の人通りせんとするは過去のこと、今日ではさうでなくむしろ今一段進んだよりよきものに

なることである。

この肖像が存在する限り、これを見たならあそこに短所お、ここに欠点があったなどいふことが却って諸君の改良進歩に資することができると思ふ。感ずる所信ずる所あるも消極的に云へば欠点を再び繰り返さないでよりよき生へのために見て下さってこそ私はうれしい。

私は何となく今ジレットタイ感じがする。感謝と共に恥しい、端的に云へばキミが悪い。この肖像を与えて下さった名誉は喜んでうける満腔の感謝を捧げます今は只云ひ現はす言葉を知らない」

除幕式の最後に、ベーツ院長が、この肖像は、かつてビクトリヤ女王、ブース大将、大正天皇の肖像を描いたカナダの世界的肖像画家フォルスター画伯に直接お願いしたものであると次のように話された由である。

「かつて私が氏を訪れた際、この肖像は学生が学院に寄付するものなら、千二百円の中、二百円だけいただきます。あとはキリスト教のため、将来つくさんとする人のための『スカラシップファンド』にしてくれと云はれたので、これを『吉岡スカラシップ、ファンド』として文学部の学生中キリスト教のために働らく人に費ふことにしました。どうか、この喜びと共に二年前死なれた松本副院長のことを偲んで下さい」と述べられたという。

や、長く引用したが、右の二つの記事は、ベーツ院長や吉岡名誉院長の遺徳を偲ぶ貴重な資料のひとつとして特に採録しておきたい。

学院生の多彩な活躍を伝える紙面から

音楽や文化・学術関係の課外活動は相変らず盛んで、たとえば、七月には、関学ハーモニカバンドは夏休みを利用する演奏旅行を計画し、一行二十五名で二十一日岡山市を振出しに呉、下関、門司等巡回の予定、とのベタ記事もある。また『阪神毎朝新聞』には、十一月二十六日夜六時より『関西楽壇の大コーラス団』一堂に集る(於宝塚大劇場)という記事が出ている。それによれば、マンドリン・クラブとかハーモニカ・ソサイエティならアマチュア・クラブはいくらでもあるが、しかし一つの組織だったコーラス団体は実に少いという。宝塚交響楽協会の主導により関西知名の大コーラス団体の出演を得て「コーラス・オリンピック・ゲーム」を開催する、として、(一)序楽「ローエンゲリン」(ワグナー作曲)、高木和夫指揮、宝塚交響楽協会、をはじめ、学院グリー・クラブや大阪外語、神戸高商各グリー・クラブや宝塚音楽歌劇学校生徒の合唱がプログラムに予定されている。

十一月下旬からは週一回一ページの「学生又新」が創設され、急速に学院情報も増大をみせている。この「学生又新」の特色は、兵庫県下の各種学校のニュースおよび学生の作品を収録、その編集は、県下の各専門学校(昇格後は大学も含む)の学生有志と神戸又新日報担当記者との協力合議によっている所にある。へただし、このページに限り、翌年七月頃からは所蔵されているマイクロ・フィルムでの欠落ページがほとんどで、その後このページは見当らないため、いつまで続いたのか確認できない。

まず「学生又新」ページ創設の十一月二十八日には、学院関係情報が満載の趣きである。たとえば文芸欄には、関西学院十河巖そごう「花に甦る乙女」フランスの古い童話」という作品が掲載さ

れ、次のような前書きがある。

「花のやうに美はしく、蝶のやうに楽しからねばならない少女が自ら此の世をすて、死んでゆかねばならない程大きな悲劇が他にあらうか。近頃、西灘に或ひは仁川に、小学校を卒えたばかりの少女が電車自殺を企てたが、重大視せねばならない社会問題の一つである。外国の或る古い雑誌に出ていた童話を次に掲げて諸君の一考をわづらはしたい」

この十河氏は、十二月三日に開催予定の早大、関学、同大三校の第二回三校講演連盟の講演会の予定弁士のひとりでもある。この三校は毎年一回秋季に各校持回りで講演会を催しているが、この年、早大に大隈記念会館の大講堂が設立された記念として開かれ、関西学院からは次の四人の弁士が名をつらねている。

「三月と学徒」十河巖、「階級闘争の尖鋭化に於ける経験現実主義の行方」北川敏男、「階級社会と権力」小山清太郎、「史的地見地より見たる無産運動」宇都宮信哉

当時の講演部（弁論部）の堂々たる活躍ぶりの一端をうかがわせる記事であろう。

また、十一月二十三日には、（原文ママ）連盟関西学生連合会主催で、「国際連盟模擬総会」が京都商業会議所で開催され、「関大、外語、古屋女塾、同大、京大並に神戸より関西学院参加」とある。七名の学生が各国正副代表になり着席、「会場には正面の連盟旗を中心に万国旗が美々しく裝飾され、国際会議の気分が横溢している」と描写されている。ここでも、学院生十河君が仮議長席に起立して、世界各地より参集した代表に対し敬意を表し、次のように開会を宣言した、と記事にある。

「過去八回の総会を通じて連盟は世界の安全保障、仲裁々判、軍備縮小の三大目的に向つて邁まい

進しつゝ、ある。今日では最早国際連盟は準備時代より建設の時代に入った今回ロシアの軍縮委員会への参加を以て世界の各国家が間直接に連盟に参加した」と述べた。なお学院生からは上月君がアルバニヤ代表に選ばれ、いわゆるバルカン問題について熱弁を奮って注目されたという。

別の欄では、「我国一番目の、私設放送の許可」「学院の笠原君認可さる」という二段抜きの記事もラジオ熱時代を表徴していて興味深い。次のような書き出しである。

「ラヂオ、ファンが待ちこがれていた素人のラヂオ放送局の開設が先日許可されて以来、放送を出願するもの多きに至ったが、この度第二人目の放送者として関西学院商科の学生、笠原功一君が開設の許可を得るに至ったので笠原君は大ぴらにラヂオのステーションを設けることになった。笠原功一君は正金銀行大阪支店長の二男に生れ、生来病弱であつたが近頃健康をいちじるしく快復し、すきな道としてラヂオの研究に余念がなかつた」と紹介され、「天下茶屋の邸」での本人の喜びの談話が掲載された。当時、私設放送の許可を得ることは大変な出来事であり、学院生の快挙のひとつといえる。

「学生又新」創設ページにはもうひとつ、「近く生れる、学生の美術展」「専門五校が連合で」「毎年一回開く予定」という二段抜き見出しの記事がある。

「神戸及び其の近郊にある専門学校、即ち神戸高工、高商、甲南高校、女学院及び関西学院の五校が連合して一つの展覧会をもとうとの企てが起りつゝ、ある。発起者は関西学院弦月画会で名称を『神戸学生美術協会』と称えるべく年一回の展覧会を開く」のが希望とのこと。ここでも学院の弦月画会が活躍しており、このクラブの伝統を感じさせる。

十二月三日には、神戸女学院主催で関西専門学校連合英語雄弁大会（於山本通・女学院大講

堂)が開かれた。この大会には関西学院からは桑原君が「余の学生としての望み」と題して登壇した、と次のような記事である。

「演説をなすべく『レディース、エンド、ゼントルメン』とやり出すと珍らしく聴衆のうちから『ナイス、ヂェントマン』との弥次が出て満場笑ひ崩れた。桑原君もちとい、気持になり過ぎたかたちで『僕の望みは第二のムツソリーニや活動の人気俳優になることではない』など長々と前置きして、『私の望みは同情と協力により新らしい時代を創造することにある』とローマの歴史から支那に於ける列国の野望の解説に説きす、め司会者の数回の時間切れのベルを聞き流して、人道と正義を愛する者をして新らしき時代の建設者たらしめよと絶叫した」という。

また、そのあと、関西学院のウツヅウオース夫人が、ある宣教師の口真似で「とても愉快なお話を表情とゼスチュア澤山にやつてのけ」たとも書かれている。

この同じページの最下段に「一段抜きの「学生の倶会のご記」という短いルポがある。倶会の「赤裸々な実相」を探訪した傍聴記で、筆者は「学院S生」の匿名である。

「俺は普選で選ばれた人だといった、風な大きな顔をして、面汚しつらよこをしながらも、たくみに妥協、抱合した、民政党と政友会とが圧倒的な多数を占めている。彼奴らの質問ときたら、阿呆らしくなってくる。何と頭のわるい連中のおそろひであることか。進んで自分の頭の程度を暴露しているんだ。その点、心強く思はれるのは、去る二十七日東京で開かれた日労党大会に出席した阪本勝氏が、昨夜帰ってきたばかりに、些の疲労の色も見せず議席に頑張っていることである。

議長席に目を転ずる。きくところによると、無産党には一言の発言もゆるさない、横暴議長ださうである。次に知事が目につく。中央専制勢力の代理人である。所謂いはゆる天下り知事がブルジョワ

と巧に野合してのさばっている」と、なかなか辛辣な観察である。

河上丈太郎教授への学院講演部の謝恩会

「教授排斥、同盟休校と、学生对学校の問題の八釜やかましい昨今」先に吉岡美国先生の建碑で「学生界に美談をのこした関西学院」では、十二月九日午後六時から中央講堂社交室で河上丈太郎教授のために、その指導を受けた講演部の学生および先輩数十名によって「心からなる謝恩会」が催された。この記事は、またも学院美談であるが、当時の学院および学院生の気風を生き生きと描写していて貴重な資料なので長い引用になるが、あえて採録しておきたい。

「河上教授は一高時代からの熱弁家であり、若き思想家としての純情の生活を続けて来られた。関西学院に教授として招かれてより講演部の顧問として、幾多の学生を指導し、常に若い学生の治安に止まらんとする心を揺り動かし、社会的正義に覚めよと鞭を打った。」

一同の自己紹介と記念撮影が終ったあと、先ず、ベーツ院長が立って、

『先生はたとへ夫が法律であつても経済であつても常に精神的な方面を忘れなかつた。之が関西学院の撮るべき道である。』

と、挨拶し、続いてウツズオース文学部長、

『河上先生はスピリツチャル、エレメントとして学院をリードした。氏は若きクリスチャン、リーダーだった。』と述べ、

次に神崎商学部長(注・高等商業学部長)は、

『私は半白の髪になったが未だ六年以上に同じ職を続けたことはなかつた、その人の一生か

ら考へて可成りに長い間常に深い印象を学生に与えた。此の影響は少からざるものである。』次に九年前の卒業生吉宗氏が立つて卒業生を代表して挨拶され、続いて高橋学生会長が熱の人と先生の徳を讃える。十河君が在學生を代表して『先生は安易に眠らんとする若き学生の胸に、火を点じ我々若い学生の胸に熱情の火を燃やし、純情と聖戦の境地に導いた。顧問としての地位を退かれても、今後も尚親く指導を期待する』と謝恩と希望の辞を述べた。最後に河上教授は感激に充ちた面持を以て、

『十年前に私が顧問として頼まれたのは院出からではなく、チャペルの時間突然一學生に頼まれたに過ぎなかった。学院に来てから最初の講演会に、当時まだマルクスの百年祭に當つてゐるにも関わらず、日本中で誰一人百年祭を催すもの、なかつた時代であつた。私は其時マルクスとデアウインと云ふ講演を試みたのでした。然し今日の學生は私よりも遙に適確にマルクスを把握している。も早若い學生の思想をよく導く事はむずかしい。他に若い指導教授を求められん事を希ふ。』

この時ノーノーと學生の聲が揚る。

『私は人生の花を咲かせて実を結ぶべき、働き盛りの三十代を学院に捧げた。此の経験は実に尊い経験だつた。私は之のみは神に誇り得ると思ふ。講演部の顧問は割に合わない顧問だ、野球部や庭球部だつたら例へ一緒に行つても自分は唯見ていればよい、然し講演部だと地方へ遊説に出かけても學生よりは多くやらねばならないし、時間も長く、よりうまくやらねばならない』

四方より笑声が起つて、和氣が漲る。

『弁論部の卒業生は兎に角社会に立って卒業生の第一線に立って働いている。学院の講演部の他校に優っている点は、その態度の高尚であり、ノーブルな点である。所謂職業政治家の嫌味がない点である。今後此のノーブルと純情を失はない様にしてほしい、その思想傾向の如何は問はない。此の一つの気風こそ私が諸君に与えた唯一のものであった。民衆に語る者の資格は純潔を持ち節操を失はで人生を送る者でなければならぬ。純なる肉と魂こそノーブルスピーカーの資格である。』

学生卒業生の胸に徹する熱ある声が止まるや、多くの先輩学生が交々立って、熱を揚げる。夜更るに及んで、霜降る校庭に校歌を高らかに歌ひつゝ、散会した。」と伝えている。「高尚・ノーブル・純情」の気風は今なお学院の伝統となつていようか。

このほか、「学院の講演をパンフレットに」というベタ記事もみられる。これまで、教授の研究発表として『商学評論』を、学生の発表機関として『商学会雑誌』を発行してきたが、今回新しい試みとして、東教授『米国的科学的関税制度』、久保教授『法律行為の實質の準拠法を論ず』の二種の三十ページのパンフレットを発行した、とのことである。

また、十二月十日には神戸高商主催全国大学高校生経済講演大会が高商大講堂で開催され、学院生からは、宇都宮信哉「資本主義社会に於ける生産者と消費者間の矛盾」の講演があった。

同日夜には愛隣英語会主催第二回英語懸賞雄弁大会が関西学院中央大講堂で開かれ、「劈頭関西学院久保君から前回の優勝旗を会長（代理）に返還し、引続き関西学院」はじめ、日、中、米、印各国青年男女の演説等があり非常に盛会であった、という記事もある。

学院の年末風物二題

学院の年末には当時も欠かせぬ行事があり、たとえば、「ポスター戦で、学生会長選挙」「候補続々起つ」といった二段抜き見出しで次のような記事が出ている。

「毎年十二月の終りになると関西学院の旧館の建物には処嫌はず、ポスターが貼られ、学生会長選挙の気分が横溢するのである。学校当局と全然離れて独立自治の組織を持っている学生会の会長は運動、講演、宗教会新聞等の各部をマネージする大任を背負はされるのである。一度会長になると殆ど満足に授業を受けられない位ひ多忙なのである。然し会長候補者は既に続出し、大體保守派と急進派の二つのバックが背後に動いている。二、三日前から候補者募集の大広告ビラが貼出されたが、恐らく、二十日頃に選挙が行はれるであらう。去年からポスターの制限が協定され此処にも普選気分が溢れている。蓋し模範的な選挙が行はれる事であらう。衆議院選挙の有権者も多勢いるのだから。」と結んでいる。学生会長選挙がかなり活発に展開されていた様子があるかがわかる。

また、十二月十九日の記事は、「三年振で旺んな、関学のクリスマスの夕」「坊ちゃん達のダンスと映画『噫無情』が余興」と二段抜き見出しで、次のような記事も報道された。

「一昨年は松本副院長の不幸で、去年は御大喪で用意万端整へながらクリスマスを持つ事が出来なかったが、今年は三年目に大々的に関西学院中央講堂で十二月二十日午後六時から学院学生会、宗教部の主催で開かれる筈。第一部はクリスマス礼拝で、二部に入ると映画チャンネルチャンネルが教育映画専門の椿氏の解説の下に映写される。又院内の松蔭幼稚園へ注いゝの坊ちゃん嬢ちゃんが大勢ステージに立って得意のダンスやお唱歌を高等部の大きなおちさん達に聴かせるそう

で、美しい保母さん達が俱命に、ピアノの鍵を叩いて練習をやっていると。尚此の外に高等部学生の音楽がある。」と予告している。今日の学院クリスマスとはや、趣の異ったものであったらしい。

なお、「学生又新」の文芸欄には時々、学院生の作品も掲載されており、十二月十二日には、十河巖氏がまたも登場しており、「鐘その他」と題して、A「情操と学校」、B「鐘と学校」についてのエッセイを書いている。B「鐘と学校」について「学生の街、牛津ではチャイムと云つて数個の鐘が一つのリズムを為して鳴り響くそうである」と書き出し、「(中略)神戸の学生街にも鐘よ響け!だが県商と云ひ関中と云ひ、工場の電気サイレンを応用して、学校の気分を根底から打壊すとは何事だらう。此のベルの音がどれだけ学生的情操に影響するか当局者は御存知ないのだらうか。」と鋭く衝いている。この十河氏は学生編集員を兼務していたと推察されるが(注2)、東京駅から大阪までの車中で知り合った「民謡を歌ふて世界遍歴中の若きルーマニア人」のことにふれ、「大阪に着くと四貫島のセツルメントで泊ると云つて握手をかはして別れた。近く関西学院のYMCAで招待する計画があると(十河生)」とレポートしている。

十二月十九日には、関西学院冬風子の名で、神戸・新川についての「貧民街小景」という一文も掲載されている。これらの諸記事を通して、当時から学院生が様々な形で社会と関わり、学院内外で多彩に活動していたことの一端がうかがえよう。(以下次稿に続く)

〈注1〉移転直前の原田の森校地略図では「松寿幼稚園」『関西学院の一〇〇年』一九八九年、五一ページ参照。

〔注2〕 関西学院新聞縦の会『関西学院新聞部四十年』昭和三十八年、一五ページに、十河巖氏（昭三・商卒）自身による「学生記者のはしり」という文章がある。それによれば十河氏は昭和二一年秋に新聞研究会を創設し、初代会長となる（副会長は藤原恵氏）。その頃『神戸又新日報』に学生版ができ、関学からは十河氏が選ばれた。「二ヶ月ほどのうちに仕事がえらいので、全部脱落して十河一人になった」「一週に一頁の原稿を書かされて、命がけでやっていた」と書いている。学院史編纂室の池田裕子氏の調査によれば、十河氏は関学卒業後、『神戸又新日報』へ入社し、その後、『朝日新聞』社会部記者となり、朝日会館館長、朝日新聞厚生文化事業団理事も歴任。昭和五二年刊の著書『あの花 この花』（中外書房刊）の奥付には、その後、サントリー宣伝部嘱託、オリエンタルホテル顧問、二科会画家とあり、著書に『ジャワ旋風』、『ざら紙随筆』、『宣伝の秘密』、『名優 雀右衛門女房おしかの一生』がある。また、『母校通信』第9号（一九五二年十月）の随想「思ひ出はなつかし」の筆者紹介では、趣味、弓道四段、洋画、随筆とあり、事実、多くの文章や著書がある。そのコラムの自画像はじめ『母校通信』第3号の「座談会・六十周年を語る」の出席者似顔絵などいずれも立派な作品ぞろいである。また、『母校通信』第10号（一九五三年五月）によれば、その年三月には十河氏は、オペラ『夕鶴』の企画と関西オペラ運動に貢献した功績で、第五回伊庭オペラ賞を受賞されている。ほかに、同窓会評議員、弦月会OB会会長なども歴任されている。